Q&A「大造じいさんとガン」の前書きと敬体について

教科書五年（下）74・75ページ

教科書五年（下）76・77ページ

Q「大造じいさんとガン」（五下）はいくつかの教科書に載っていますが、教科書によって「前書き」があったりなかったり、文末が常体のものと敬体のものとがあったりします。どうしてこうした違いがあるのでしょうか？

A 五年下に掲載されている「大造じいさんとガン」には、物語に入る前に、「知り合いのかりゅうどにさそわれて、わたしは、イノシシがりに出かけました。」という一文で始まる「前書き」がついています。そこには、イノシシがりで大造じいさんと出会った語り手が、じいさんの若かりしころの思い出話を語ることになるいきさつが書かれています。この「前書き」を読み、「こしひとつ曲がっていない、元気な老かりゅうど」という大造じいさんから若かりしころの姿を想像することで、読者である子どもたちは、壮年の大造じいさんと、ガンのリーダーである残雪の間に展開されるドラマとしてこの物語を読み味わうことができます。

「大造じいさんとガン」は、掲載図書によって前書きがついていないものがありますが、光村図書では、この作品にとって前書きは非常に大切であるという認識から「前書き」がついたものを教材化しています。

作者である椋鳩十さんがこの作品について語ったことによると、出版社に送った最初の原稿には前書きが付けてあったそうです。しかし、『少年倶楽部』（昭和十六年十一月号　講談社）に発表されたときには、理由はわからないが前書きは外れていたそうです。その後、短編集『動物ども』（昭和十八年　三光社）を出版する際に、「前書き」を復元し、常体を敬体に改めたということです。

「前書き」の復元について椋さんは、「いろりばたで話を聞いているような雰囲気でね。」と語られているそうですが、まさにこの作品は〈語りの世界〉といえるでしょう。

また、文末については、作者自身が途中から常体を敬体に直しているように、〈語りの世界〉にふさわしいのは敬体〈です・ます〉であると考えます。文末についても敬体と常体の作品が出版されていますが、光村図書では敬体を採用しています。

「教科書ここが知りたい」は、国語編集部に寄せられる疑問・質問にお答えするコーナーです。「こんなことを取り上げてほしい。」などのご意見を広報課までお寄せください。

FAX 03-3493-5483
なお、光村チャンネルもあわせてご覧ください。
http://www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp